第一章　原始社会から倭王権へ

西求女塚古墳

第一節　古代社会への胎動

第二節　倭王権の神戸市域への進出

第一節　古代社会への胎動

1　地域区分と考察の視点

六甲山地周辺の水系

神戸市域は、六甲山地をとりまく水系に注目すると、南部（東灘・灘・中央・兵庫・長田・須磨区）・西部（垂水・西区）・北部（北区）に分けられる。

六甲山地の南部は、芦屋川、住吉川、石屋川、都賀川、旧生田川、旧湊川、旧苅藻川、妙法寺川など、小さな河川がいくつも南流している。これらの河口部には砂堆が形成され、その後背湿地では稲作が行われていた。特に旧湊川より西側では大きな砂堆が形成され、活発に稲作が行われていたと考えられる。

六甲山地の西部は東側の小さな河川の南流域と西側の明石川水系に大別され、それぞれの河口部には砂堆が形成されていた。そして、小河川域は塩屋谷川と福田川の流域、山田川と朝霧川の流域に細別される。また、明石川水系は下流域、中・上流域、支流の中・上流域に細別される。このなかで、明石川の下流域は生産性も高く、この地域の中心地であった。

六甲山地の北部は、東側の武庫川水系と西側の加古川水系に大別される。そして、武庫川水系は北流する

有馬川・有野川・八多川の中・上流域、東流する長尾川の中・上流域、合流した有馬・有野・八多・長尾川が武庫川に流れ込むあたりに細別される。このなかで有馬川と長尾川が合流する所は生産性も高く、この地域の中心地であった。また、加古川水系は志染川の上流域、淡河川の流域に細別される。

銅鐸・拠点集落と銅鏡・古墳

銅鐸は収穫に関する祭りの時、弥生時代の集落で使われた。これらの祭りを通して地域社会における共通の規範や集団意識が作られていった。当時の地域社会は、拠点集落と呼ばれる大きな集落を中心として、その周りに一般的な集落が広がっていた。

拠点集落は、四〜五キロメートルごとに点在し、農業だけでなく石材や青銅などの調達や加工を行い、一般集落に分配していた。拠点集落にいた有力者は、このような行為を通して周辺の村落との間に一つの地域社会を形成するとともに、各地の地域社会との交流を深めていった。したがって、銅鐸や拠点集落の分布を見ていけば、弥生時代における神戸市域の社会統合のあり方を推測できる。

古墳時代になると、銅鏡を中心とした祭りが行われるようになった。そのなかでも特に三角縁神獣鏡と呼ばれる銅鏡は、大和や河内の政治集団が、政治的な関係を結んだ各地の有力者に配布した可能性が高い。有力者は、古墳と呼ばれる墓に葬られる時、いろいろな物品とともに銅鏡を副葬した。

古墳には、円墳・方墳・前方後方墳・前方後円墳などいくつかの形式がある。そのなかでも前方後円墳は、大和や河内の政治集団との関係が強い有力者が葬られていると見なされている。したがって、古墳に副葬されている銅鏡や古墳の形式を見ていけば、古墳時代における神戸市域の社会統合のあり方を推測できる。

そこで、以下では『新修神戸市史　歴史編Ⅰ　自然・考古』（一九八九年。以下、『市史』Ⅰと略記）の内容に、

最近の発掘成果などを盛り込みながら、銅鐸・拠点集落や銅鏡・古墳のあり方を整理し、神戸市域における原始社会から古代社会への移行過程を見てみたい。

2　弥生時代の神戸市域

六甲山地の南部

前期の前葉から後葉にかけて、北青木遺跡・本山遺跡・処女塚古墳の付近・雲井遺跡・宇治川南遺跡・大開遺跡・上沢遺跡など、各地で集落が形成された（図1）。前期の終わりから中期の初めにかけて、温暖化にともなう海面の上昇、洪水にともなう急速な砂礫の堆積、稲作の開始にともなう人口の増加など、状況変化に対応した居住域を求める必要が生じた。そのなかで本山遺跡、雲井遺跡、楠・荒田町遺跡、戎町遺跡などの拠点集落が数キロメートルごとに形成されていった。

六甲山地の南部における銅鐸の出土状況から、次のような想定がなされている（『市史』I）。当初は、芦屋川、住吉川、石屋川、都賀川、旧生田川、旧湊川、旧苅藻川、妙法寺川などの流域ごとに、一つの銅鐸を使った祭りが行われていた。その後、芦屋川の流域では森銅鐸を使っていた集団が何らかの理由で崩壊し、生駒銅鐸を使う集団に編成された。それに対して石屋川より西側では、四つに分かれていた集団が二つの集団に編成され、その後、石屋川西岸の集団に統合された。

この想定の是非はにわかに決めがたい。しかし、少なくとも銅鐸や高地性集落などは芦屋川から都賀川の間に集中しており、これらの地域では都賀川より西側と比べて、地域社会の再編や統合が活発であったのか

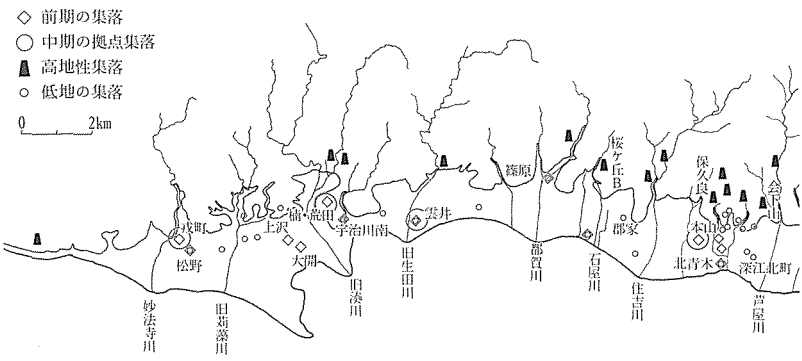


図1　弥生時代における六甲山地南部の主要な集落跡
（『新修神戸市史　歴史編Ⅰ』の図122・127を基に一部加筆して作成）

もしれない。

六甲山地の西部

前期の前葉には吉田遺跡・新方（しんぼう）遺跡・玉津田中遺跡など、明石川の下流域を中心に集落が形成された（図2）。そして、後葉になると明石川中流の西戸田遺跡・常本（つねもと）遺跡、山田川流域の大歳山（おおとしやま）遺跡などにも集落が形成された。その後、新方遺跡や玉津田中遺跡は、中期から後期にかけて拠点集落として発展していき、他の地域からもたらされた石器や土器も出土している。そして、玉津田中遺跡では製作途中の石庖丁や青銅器を作る鋳型などが、新方遺跡では碧玉製の玉を作っていた痕跡が見つかっている。

明石川の上・中流域では、西戸田・常本遺跡の周辺に、明石川流域以外では、垂水・日向（ひゅうが）遺跡の周辺に拠点集落が想定されている（『市史』Ⅰ）。しかし、今のところ良好な資料は見つかっていない。明石川流域以外では、拠点集落が想定されている福田川流域の垂水・日向遺跡よりも山田川流域の大歳山遺跡の周辺で、弥生時代や古墳時代の考古資料が多く見つかっている。明石川東岸の小河川域では、山田川流域が中心的な役割を担っていたのかもしれない。

六甲山地の南部と同じように、西部でも中期の後半（一世紀の前

後）には高地に、後期には低地に集落が形成された。それにともない明石川の下流域では新方遺跡が停滞していき、吉田遺跡の南側に後漢時代の内行花文鏡の破片も見つかっている吉田南遺跡が形成されていく。そして、大歳山遺跡では集落の一部が、伊川（明石川の支流）の中流にあった池上口ノ池遺跡では集落の全体が後期の末に焼失している。

『三国志』魏志倭人伝に「卑弥呼が、（二世紀の末から三世紀の初めに）女王になる前と、（三世紀の中頃に）死亡した後、倭国は乱れた」と記されていることを勘案すると、弥生時代から古墳時代へ移行する頃には、地域社会の再編や統合が進んだと言える。

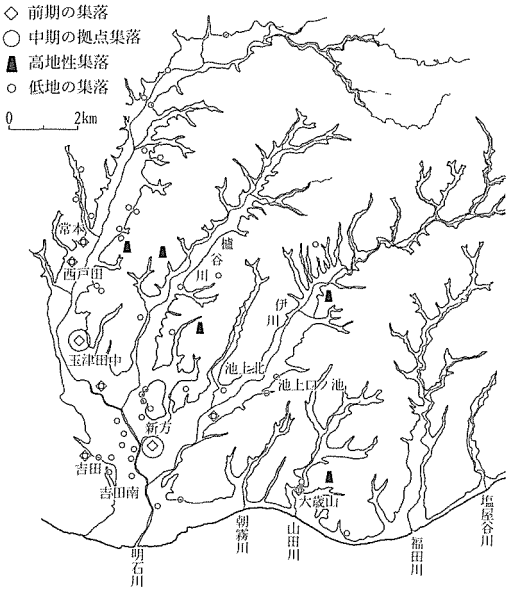


図2　弥生時代における六甲山地西部の主要な集落跡
（『新修神戸市史　歴史編Ⅰ』の図123・128を基に一部加筆して作成）

六甲山地の北部　武庫川水系の有馬川・有野川・八多川・長尾川の流域は、圃場整備に伴う発掘調査が行われてきた。主な遺跡は、これらの河川の合流域に集中している（図3）。その中で、有野川の南岸には前期の後半に塩田遺跡が形成され、拠点集落として発展していった。集落の中では石庖丁などが製作され、後期にも営まれていった。その対岸には、神戸市と三田市の境界となっている東西にのびる丘陵（通称は八景丘陵）が

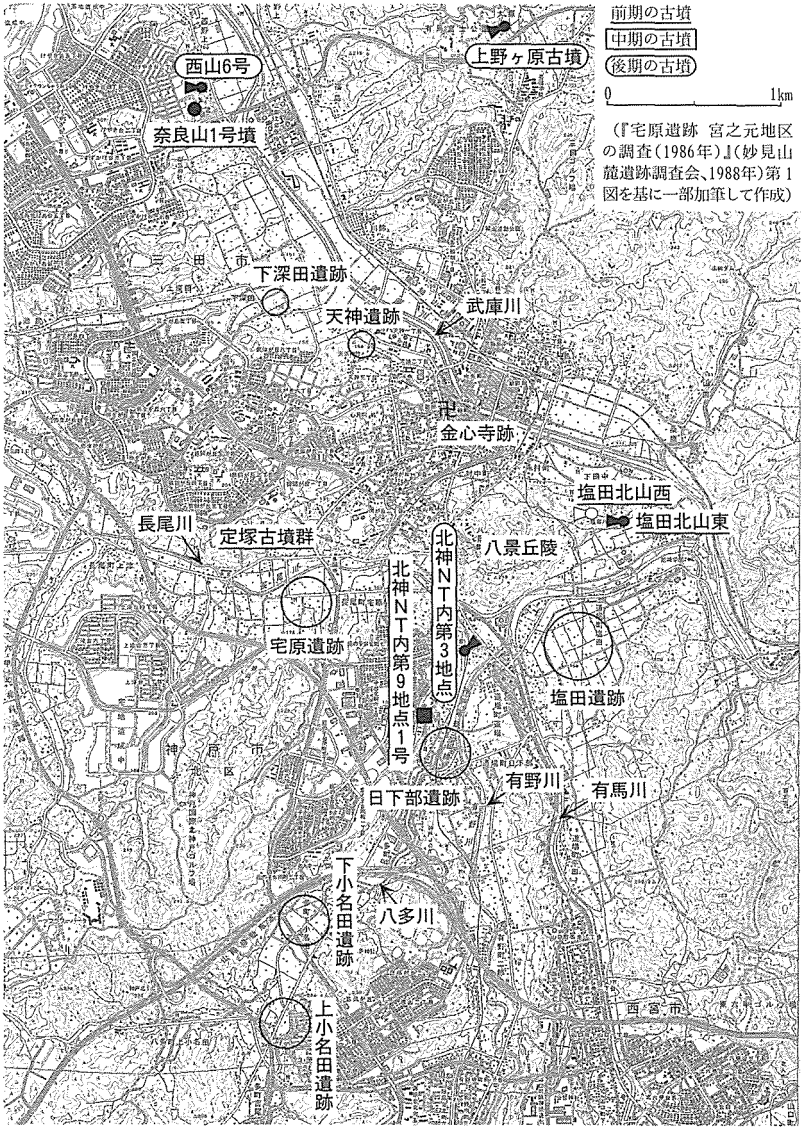


図3　弥生・古墳時代における六甲山地北部（有馬川流域）の主要な遺跡

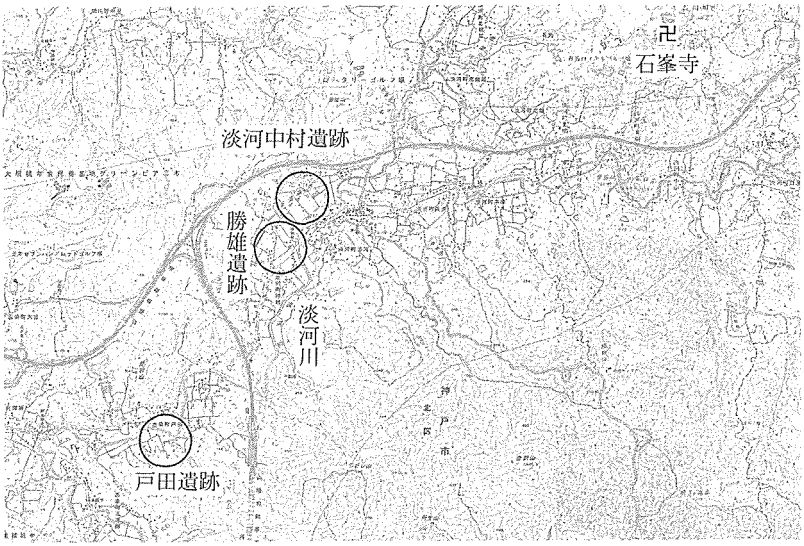


図4　弥生時代における六甲山地北部（淡河川流域）の主要な遺跡
（国土地理院発行二万五千分一地形図　淡河を基に作成）

ある。この丘陵の北側（武庫川の南岸）には、前期の後半に対中遺跡や三輪餅田遺跡が形成された。そして、中期の後半から後期にかけては、天神遺跡や小深田遺跡が形成され、拠点集落として発展していった。

この八景丘陵をはさんだ地域は、原始・古代を通して三田盆地（後の摂津国有馬郡）の中心地であった。その後、六甲山地の南部や西部と同じように、中期以降には農耕生活が定着し、遺跡の数が増加していき、武庫川流域などには高地性集落も営まれた。そして後期になると、塩田遺跡や宅原遺跡など、低地に大規模な集落が形成されていった。

一方、加古川水系の志染川上流域や淡河川流域は、発掘調査も少なく不明な点が多い（図4）。その中で淡河川流域には、後期から終末期にかけて戸田遺跡・勝雄遺跡・淡河中村遺跡などの集落が散在的に形成された。六甲山地の北部では、後述

のように、石材などを通して讃岐と密接に交流しており、戸田遺跡からは讃岐から運び込まれた土器も見つかっている。

これらの石材や土器は、主に加古川や美嚢川を通して、淡河川や志染川の流域へ持ち込まれたものと考えられる。しかし、同じ形態の土器が玉津田中遺跡で出土していること、後述のように、志染川と明石川の流域を結ぶ内陸交通が盛んであったことから、明石川を媒介とした六甲山地の北部と瀬戸内海沿岸との交流も考慮しておく必要がある。

3　古墳時代の神戸市域

六甲山地の南部

前期（三世紀の中葉から四世紀）の古墳は、都賀川流域より東側では集落に近い平野部に多く、早い時期から前方後円墳や大形の前方後方墳が作られ、三角縁神獣鏡も副葬されている（図5）。一方、都賀川流域より西側では丘陵や尾根の上に多く、東側よりもすこし遅れた時期から前方後円墳が作られ、三角縁神獣鏡も副葬されていない。これは、都賀川流域より東側が大和や河内の勢力との関係が密接であり、六甲山地南部の中心地であったことを示している。

都賀川流域より東側では、まず西よりの石屋川と都賀川の付近に、地域性の強い前方後方墳（西求女塚古墳、処女塚古墳の順）が作られた。西求女塚は、南部に造営された前方後円墳や前方後方墳の中でもっとも古い古墳（三世紀の後半）であり、三角縁神獣鏡がもっとも多く副葬されていた。撥状の前方部は箸墓古墳を

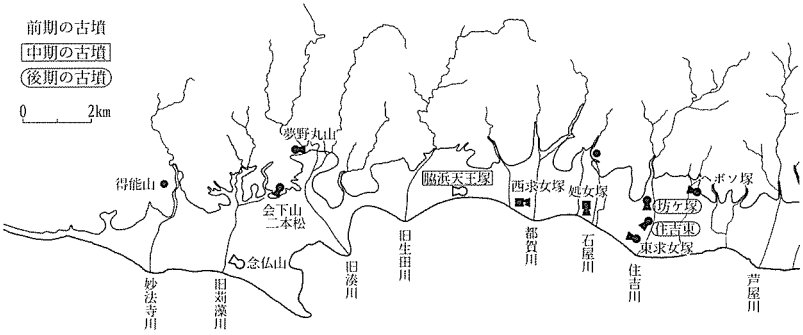


図5　六甲山地南部の主要な古墳
（『新修神戸市史　歴史編Ⅰ』の図145を基に一部加筆して作成）

モデルにしていたとも言われ、後方部の墳頂からは葬送儀礼に使われた山陰系の土器も見つかっている。後述のような状況を踏まえると、これらの古墳は、倭直（やまとのあたい）と関係していたのかもしれない（本章第二節3項参照）。

古墳の被葬者は、大和や河内の勢力だけでなく、日本海の沿岸地域とも交流していたと考えられる。桜ヶ丘銅鐸の埋納などを勘案すると、石屋川や都賀川の付近には、周辺地域だけでなく、都賀川流域より東側もしくは南部全体を統轄するような集団が成長していたのかもしれない。大和や河内の勢力は、当初この集団の独自性を尊重しながらも、政治的な関係を結んでいた。しかし、その後、住吉川の付近（東求女塚古墳→ボソ塚古墳）や旧湊川の付近（夢野丸山古墳→会下山（えげやま）二本松古墳）には前方後円墳が作られており、大和や河内の勢力が、南部の地域社会へ深く関わるようになっていった。

前期後半から中期（四世紀後半から五世紀）になると、都賀川と旧生田川の間に脇浜天王塚（わきはまてんのうづか）古墳が、旧苅藻川河口部の東岸に念仏山古墳が前方後円墳として作られた。念仏山古墳は、後述の五色塚古墳とほぼ同じ時期に、ほぼ同じ大きさで作られたと推定されている（『市史』Ⅰ）。そ

して、念仏山古墳の造営集団が、四世紀の後半から五世紀の初め頃に六甲山地の南部を支配するようになり、その後、五世紀の中期もしくはそれ以降に、脇浜天王塚古墳の造営集団が、その機能を継承したと想定されている。

しかし、脇浜天王塚古墳は大部分が破壊されており、念仏山古墳は市街化によって何も残されておらず不明な点が多い。もしこれらの古墳が存在したとする推定が認められなければ、六甲山地の周辺では、福田川の西側にあった五色塚古墳まで前方後円墳が作られなかったことになる。上記のような、『市史』Ⅰの推定や想定が妥当かにわかにわからないが、少なくとも六甲山地の南部では、四世紀の後半から五世紀に入る頃に地域社会の変動があり、主要な古墳の造営地は、都賀川流域の東側から、西側もしくは福田川の西側へ移動していったと言える。

五色塚古墳は、四世紀から六世紀に六甲山地の周辺で作られた古墳と比べ格段に大きく、明石海峡を強く意識した所にある。これは、後述のように倭直や凡河内直などの盛衰、倭王権による神戸市域への進出状況、朝鮮半島へと通じる瀬戸内海交通の再編などを反映していたのかもしれない。

後期（五世紀後半～六世紀）の古墳は、六甲山地の南部が市街化しており、あまり見つかっていない。そのなかで、住吉川の西岸（住吉宮町遺跡）では、坊ヶ塚古墳（前方後円墳）、住吉東古墳（帆立貝式古墳）、方墳七一基以上などが連続して作られている。

六甲山地の西部　三世紀後半には、弥生時代の拠点集落であった新方遺跡の近くの天王山（西区伊川谷町潤和）や、拠点集落が付近にあったと推定されている西戸田遺跡・常本遺跡から約二キロメートル離れた明石川の対岸（同区平野町繁田・堅田）で、方墳が継続的に作られた（図6）。ただし、後者の古墳と西戸

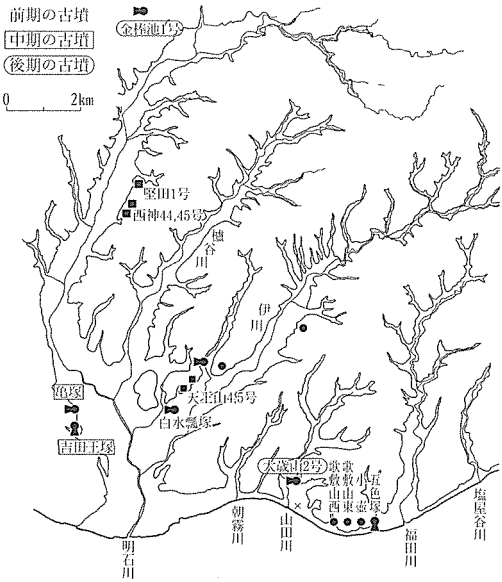


図6　六甲山地西部の主要な古墳
（『新修神戸市史　歴史編Ⅰ』の図128を基に一部加筆して作成）

田遺跡・常本遺跡の集団は無関係と言われている。

一方、明石川流域の拠点集落のうち、残りの一つであった玉津田中遺跡の周辺には特徴的な古墳もなく、奈良時代にかけて小規模な集落になっていく。その後、天王山の近くには、四世紀の後半に白水瓢塚（しらみずひさごづか）古墳（前方後円墳）が作られた。新方遺跡を中心とした明石川下流域の集団が、大和や河内の勢力と関係を持ち始めたのである。かつてこの古墳の近くには夫塚（おっとづか）（白水瓢塚古墳よりも大形の前方後円墳）があったと言われていた。しかし、最近の調査によりなかったことが確認されている。

中期になると、新方遺跡の対岸（明石川の西岸）には、吉田王塚古墳（前方後円墳）が作られた。その南側には、弥生時代の後期から形成された吉田南遺跡の集落が、北側には古墳時代の中期から形成された出合（であい）遺跡の集落があった。前者には、奈良時代になると明石郡の郡家（ぐうけ）が設けられた。後者には、中期後半になると亀塚（出合一号墳、帆立貝式）が作られた。出合遺跡からは朝鮮半島系の土器も見つかっている。

また、新方遺跡の対岸（伊川の東岸）には、古墳時代の後期に寒鳳（かんぷう）遺跡が形成された。ここからは大壁造

りの建物（柱などを壁のなかに埋め込んで作る住居、渡来人との関連が指摘されている）が見つかっている。そして、この集落の近くには、飛鳥時代の末に太寺廃寺が建立された。

このように、明石川下流域における遺跡の中心地は、大和や河内の勢力を背景としながら、新方遺跡から周辺の対岸へと展開しており、六甲山地西部の地域社会は、大きな画期を迎えていたと考えられる。

一方、明石川の東側における小河川の南流域では、四世紀の後半に五色塚古墳が作られた。その葺石は、材質から淡路島で産出したものと推定されている。「播磨に詣りて、山稜を赤石に興つ。仍りて、船を編みて淡路島に絙して、その島の石を運びて造る」（『日本書紀』神功摂政元年二月条）という記事は、この造営過程を示している。五色塚古墳は、それ以外の前方後円墳とは異なり、近くに集落や耕作地がなく、明石海峡を見下ろす場所にあった。

写真１　五色塚古墳（垂水区）

この近くには、ほぼ同じ時期に小壺古墳（兵庫県内では、朝来市和田山町の茶すり山古墳に次いで二番目の大きさの円墳）、歌敷山古墳群、舞子浜遺跡など、副葬品や埋葬方法が異なる古墳があった。階層差のある人たちが、五色塚古墳の埋葬者を頂点としてそれぞれの古墳に葬られたのである。

後期になると、小河川の南流域では、六世紀の前半に、大歳山二号墳（前方後円墳）が作られた。大歳山遺跡には、四世紀の末

にも古墳が作られていた。また、明石川の上・中流域では金棒池一号墳（前方後円墳）が作られた。明石川の中流域からこの古墳が作られた丘陵を通り抜けると、志染川の中流域に出られる。このルートは、古来より今日に至るまで往来が盛んな所でもある。大和や河内の集団は、このような内陸交通の要衝にも勢力を延ばしてきたのである。

六甲山地の北部　武庫川水系の有馬川・有野川・八多川・長尾川流域では、弥生時代の末から古墳時代の初め頃（三世紀の中頃）に、宅原遺跡の北側の丘陵に定塚古墳群が、前期の前葉から中葉には、塩田遺跡の北側の通称八景丘陵に塩田北山東古墳が作られた。

塩田北山東古墳は、現在三田盆地で確認されている唯一の古墳時代前期の前方後円墳であり、三角縁神獣鏡も出土している。三角縁神獣鏡は、これまでに全国で四九〇面以上見つかっている。この古墳から出土した三角縁鏡は、仏教に関する図像が施されたものであり、全国でも九面しか見つかっていない。そして、この古墳の隣りには、それよりも古い前方後円墳と推定されている塩田北山西古墳がある。

この地域の有力者は、代々大和や河内の政治集団と密接に関係していたのである。この二つの古墳は、八景丘陵を南北にぬけるルートに近く、塩田遺跡や有馬川と武庫川の合流地点を望む所にある。八景丘陵の南側を拠点としながらも、三田盆地や武庫川を利用した水運、六甲山の北側を通過する陸運に影響を及ぼした有力者が葬られていたと考えられる。

中期の大型古墳は今のところ見つかっていない。塩田北山古墳に埋葬された一族が、その後どうなったのか不明である。しかし、この一族の盛衰と有力な古墳の断絶は、この地域に設置された日下部とその管掌氏

族の動向と密接に関係していたと言える。

後期になると、有野川や有馬川の中流、武庫川と有野川が合流する地点の東側、武庫川の上流と内神川・青野川が合流する所、山田川の流域など、各地に群集墳が作られた。もっとも集中的に作られたのは八景丘陵の付近であり、有馬川・有野川・八多川・長尾川の上・中流域は少なかった。その中で、長尾川と有馬川の合流地点の南側（北神ニュータウン内第三地点古墳、六世紀中頃）、塩田北山古墳の尾根を挟んだ北側地域には前方後円墳（上山一号墳、西山六号墳）が作られ、各地の有力者が大和や河内の集団と関係を築いていったことがわかる。

一方、加古川水系の志染川・淡河川流域では、今のところ、大型古墳は見つかっていない。淡河川の流域で散在的に暮らしていた弥生時代の人々は、古墳時代になると社会統合され、淡河中村遺跡の周辺に居住していたと想定されている。淡河中村遺跡からは、五世紀後半の竪穴住居とともに、朝鮮半島系の土器が見つかっている。また百済系の渡来人が、宝亀十一年（七八〇）に、淡河盆地の開拓を行ったという伝承も残されている（『兵庫県美嚢郡誌』）。この地域の開発と渡来人は密接に関係していたのかもしれない。

4　石材・鉄材の変化と倭王権の誕生

石材を介した交流

弥生時代の神戸市域では、主に垂水区から淡路島の北端で産出する岩屋産、大阪府と奈良県の境で産出する二上山産、香川県坂出市付近で産出する金山産の石材（サヌカイト）が持ち込ま

表1　神戸市域における主要な石材の産出地

地域	弥生時代			
	前期	中期		後期
南部	金山	二上山		？
西部	岩屋	金山	二上山	
北部	？	二上山	？	金山

（『新修神戸市史　歴史編Ⅰ』の図125を基に作成）
上記の傾向は、最近の発掘調査においても同じである

れていた。当初、六甲山地の南部では金山産（六甲山地の南部）が、西部では岩屋産（明石川の流域）が多く、二上山産は二〇％程度であった。その後、六甲山地の南部では二上山産、明石川の流域では金山産の割合が高くなる。

しかし、弥生時代の中期後葉になると、両地域では二上山産が六五％となり、二上山を中心とする大阪湾沿岸の交流が拡大していたことがわかる。これらの地域は海に面しており、海上交通などを利用して主体的に石材を入手していたと思われる。

一方、六甲山地の北部では、当初二上山産が多く、金山産は一〇％程度であった。しかし、鉄材が普及し始める弥生時代の後期になると、金山産が七〇％となった。鉄材の普及とともに、石材の供給を停止していった河内方面からサヌカイトを入手できなくなり、讃岐方面との交流が盛んになったのである。

これらの地域は、河川交通があるとはいえ、産地との距離も遠く、河口部にあった地域社会の影響を受けながら、石材を入手していたと思われる。三田盆地で見つかる弥生時代の土器は、西摂津の平地部（尼崎市田能町や西宮市仁川町）や丹波の影響が強いと言われており、武庫（むこ）川や猪名（いな）川の流域を通して石材を入手していたと考えられる。ただし、二上山産から金山産に変わった時、武庫・猪名川流域がどのように関わっていたのか不明である。

大和・河内勢力から倭王権へ

このように、神戸市域は、石材を利用していた当初、産出地や交易ルートなど、各地の状況に応じていろいろな地域と交流していた。しかし、六甲山地の南部と西部は、しだいに二上山方面との交流を強めていった。二上山のサヌカイトは、神戸市域だけでなく、近畿を中心として広い範囲で使われていた。これらの地域では、大局的に見れば市域と同じような変遷をたどったと推定される。

二上山のサヌカイトの採掘から分配に関わっていた集団は、石材よりも優れた鉄材が朝鮮半島にあること知ると、それを獲得して分配するため、これまでよりも広い範囲の人々と交流していた。大和や河内の集団は、しだいに政治的な集団へと発展し、朝鮮半島へと通じるルート上にいた有力者と同盟を結んでいき、倭王権（おうけん）と呼ばれる政治組織を誕生させた。

同盟関係にある集団は、同じ形式の銅鏡や古墳を媒介とし、共通の規範や秩序を作り上げていった。そして、倭王権は、朝鮮半島の人々との交流を通して、鉄材や各種の物品・技術・思想などを入手し、同盟関係にある各地の集団に分配していった。

各地の原始社会は、神戸市域を含め、このような時代の流れに巻き込まれたり主体的に関わりながら、古代社会へと移行していった。そして、最終的には、地域社会で発生するいろいろな問題を解決し、東アジア諸国との関係を政治的に処理するため、各種の組織や制度を整備していき、大王（後の天皇）を中心とした中央集権的な古代国家を生み出していった。

神戸市域の沿岸部は、大和や河内の政治集団と近く、朝鮮半島へと通じるルート上にあったことから、上記のような時代の流れに大きな影響を受けながら、次節のような展開をとげたのである。

第二節　倭王権の神戸市域への進出

1　葛城臣・大伴連の盛衰と部民・渡来人の編成

縮見屯倉と億計・弘計王

安康天皇は、七歳の眉輪王（皇后と前夫である大草香皇子の子）に殺される（図7、天皇という称号は七世紀の後半に成立するが、便宜上使用する）。眉輪王は、大泊瀬にいた稚武皇子（後の雄略天皇）に追われ、葛城円大臣（履中天皇の時から国政を担い、次の王位をめぐって稚武皇子と対抗関係にあった）の家に逃げ込んだ。円大臣は、眉輪王をかくまった罪を許してもらうため、娘の韓媛と「葛城宅七区」を献上した。稚武皇子は、韓媛を妃としつつも、円大臣と眉輪王を殺してしまう（稚武と韓媛との間には、後の清寧天皇など、一男一女が生まれた）。

そして、その後も狭々城（滋賀県蒲生郡安土町付近）を本拠地にしていた山君韓帋宿祢を利用し、磐坂の市辺（奈良県天理市から桜井市付近）にいた押羽皇子など、王位に就く可能性がある兄弟や従兄弟を次々と殺していった。

『日本書紀』によると、押羽皇子は、青海皇女（飯豊皇女）とともに、履中天皇と黒媛（葛城葦田宿祢の娘）

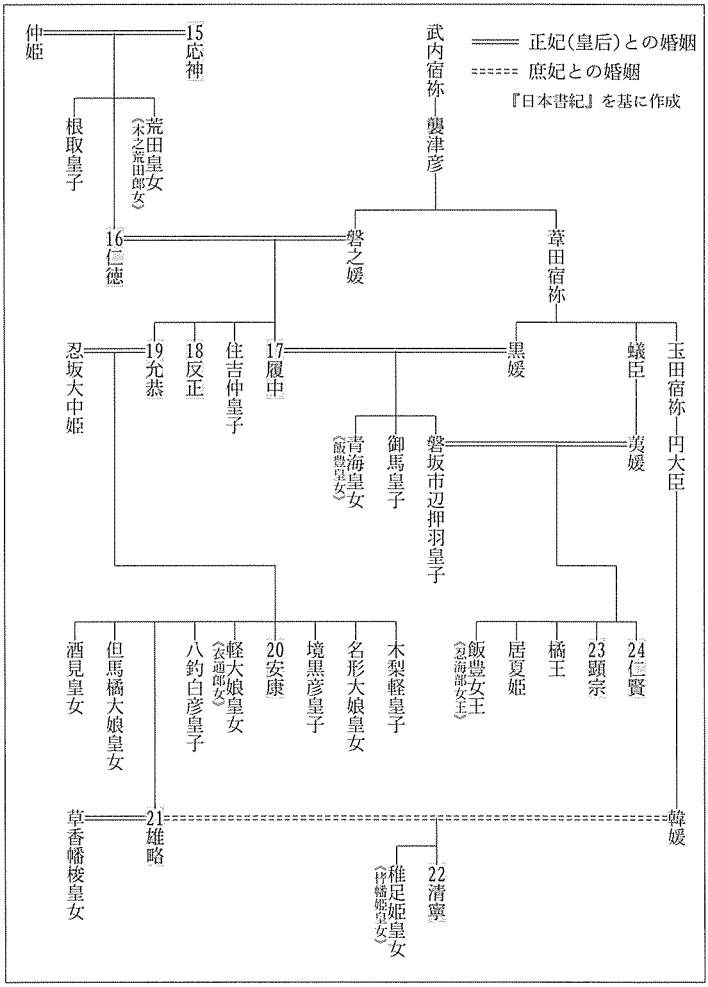


図7　応神天皇から仁賢天皇と葛城氏との婚姻関係

との間に生まれた皇子で、安康天皇が次の王位継承者と考えていたとか、安康天皇の死後に市辺宮で大王の職務を代行していたとも言われる有力者であった。そして、蟻臣（ありのおみ）（葛城葛田宿祢の子）の娘である蓢媛（はえひめ）との

間には、億計王（島稚子・大石尊）、弘計王（来目稚子）、飯豊（青）女王（忍海部女王）など三男二女の皇子女がいた。

押羽皇子の死後、雄略天皇の矛先が億計王と弘計王に向けられる可能性が生じてきた。そこで押羽皇子の帳内（親王や内親王に仕え雑役や警備を行った下級の役人）であった日下部連使主とその子の吾田彦は、二人の皇子を連れ出して丹波国与謝郡へ向かった。使主は、途中で名を田疾来と変えるが、殺されることを恐れ、播磨の縮見山の石室で自害してしまう。弘計王は、兄や吾田彦とともに、西区北部から三木市南部にあった縮見屯倉の首であった忍海部造の細目の所へ向かい、使用人として隠れ住んだ（第二章第四節2項参照）。

それから二十五年後（清寧天皇二年十一月）、来目部の小楯（磐楯）が都からやって来た。小楯は播磨に派遣された「司」であり、赤石郡（神戸市西区から明石市付近）で新嘗（祭）に供える物を調達していた。その時、縮見屯倉首の家では祝宴が行われており、小楯も出席した。弟の弘計王が中心となり、祝宴の席で自分たちの身分を明かした。それを聞いた小楯は、急いで「柴宮」を作って皇子たちを住まわせ、清寧天皇へ報告した。皇子がいなかった清寧天皇は大いに喜び、赤石に使者を派遣し二人の皇子を迎え入れた。

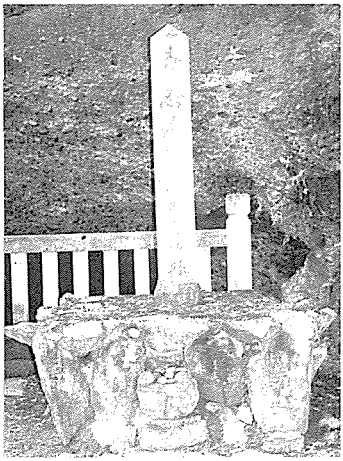


写真2　志染の石室（三木市）

四十一歳の清寧天皇は、兄の億計王を皇太子とし、二年後に死んだ。二人の皇子は王位をお互いに譲り合い、一〇

カ月が過ぎた。その間は、飯豊女王が葛城川上流の忍海にあった角刺宮で大王の職務を代行した。飯豊女王が四十五歳で亡くなると、弟が即位して顕宗天皇となった。

顕宗天皇は、自分たちを見出してくれた前播磨国司の小楯に、彼が希望した山官の役職を与え、氏族の名前を「山部連」に改称させた。そして、小楯の補佐役として吉備臣を任命し、経済的な基盤として山守部を設置した。また、父の殺害に加担した狭々城山君韓帋宿祢を陵戸とし、韓帋が領有していた人を山部連に与えた。また、父の遺骸の場所を教えてくれた置目の兄である倭帋宿祢は、本姓にもどし、狭々城山君（佐々貴山公）とした。顕宗天皇が三年後に亡くなると、兄が即位して仁賢天皇となった。

葛城臣の興亡と倭王権の発展

この説話の頃（四・五世紀）は、葛城臣の娘を妻や母とする大王が多かった。葛城臣は、大和や河内の勢力が西方へ進出し始めた時、大阪湾の沿岸や朝鮮半島へと通じる水上交通を掌握するとともに、忍海漢人などの渡来人を支配下に組み込んでいった。大和や河内の大形の古墳では、五世紀の前半頃、加古川下流の西側で取れた竜山石を使って棺が作られていた。

葛城臣は、この竜山石の分配に関わっていたとも言われ、二上山の東側を北流する葛城川の流域を本拠地にしていた。この地域は八世紀以降葛上・葛下・忍海・広瀬郡に分割された。葛下郡と広瀬郡には山直郷と山守郷があり、山部と呼ばれる部民が葛城地域にいたことがわかる。山直郷（二上山の北側にある穴虫峠付近）は、当初山部君の本拠地であり、山君里と呼ばれていた（威奈真人大村墓誌銘）。

大和や河内の政治勢力は、二上山で取れる石材の調達や分配から、朝鮮半島で取れる鉄材の調達や分配へと移行していくなか、形成され発展していった。葛城臣は、葛城川の上流と下流を本拠地にしていた玉田宿

祢系と葦田宿祢系の一族に分かれながら、水上交通の拠点や資材加工の技術者などを掌握し、大和や河内の政治勢力のなかで中心的な役割を担うようになった。

しかし、葛城臣は、独自性を強めていったために、允恭天皇や雄略天皇によって討伐され、眉輪王の事件を契機として没落していった。その後『日本書紀』で一族の名前が見えるのは、崇峻天皇の時に物部連を討伐したり、任那を復興したりするために派遣された軍勢のなかにいた葛城臣鳥那羅だけである。ただし、雄略天皇に滅ぼされた葛城臣は、玉田宿祢系であり、葦田宿祢系の一族は存続したと考えられている。

倭王権は、雄略天皇の頃、葛城臣・和迩臣・吉備（上道）臣などの有力な一族による連合政権から、大伴連や物部連などの群臣による職務分掌をともなう政権へと移行していった。また、渡来人が馬の飼育や鉄の精錬・鍛造などに組織されるとともに、大王へ飲食物を提供する御料地などが設定され、王位の絶対化が急速に進んでいった。

円大臣が滅ぼされる時に雄略天皇に葛城宅を献上したり、葛城臣や吉備臣が没落した後に東漢人や山部などの再編が行なわれたりしているように、葛城臣が領有していた土地や人民は葛城臣の衰退により、大王や政府によって部民や屯倉の新設や再編が行われたのである。

神戸市域にあった菟原郡布敷郷は、『新撰姓氏録』の摂津国皇別に記されている布敷首の本拠地であった。『新撰姓氏録』とは、弘仁五年（八一四）に京や畿内にいた一一八二の氏族の系譜をまとめたものである。布敷首は、葛城襲津彦（武内宿祢の男）を始祖とし、葛城襲津彦を始祖とする布師臣（和泉国皇別）や、武内宿祢を始祖とする布師首・布忍首（左京皇別・河内国皇別）と同じ一族であった。

布師臣は、和泉国和泉郡坂本郷を本拠地とする坂本朝臣と同じ始祖であり、同じ郡の八木郷や讃岐国山田郡にもいた。布師部（宮麻呂）が讃岐国鵜足郡川津郷に住み（『法隆寺聖武帝御褥記』）、布師郷が越中国射水郡や土佐国安芸郡にもあったことから、布敷首とはヌノシベ（布敷・布師・布忍部）を統率する職務名にもとづいた氏族名であり、その集団のいた所がヌノシというサト名になり、その後、生田川の上・中流域を布引と呼ぶようになったという考え方もできるかも知れない（下流域の布引町は、この地名にもとづいて、近代に命名）。

ヌノシベという部民が、七世紀の中頃以前に、どのような役割を担っていたのか明らかでないが、氏族系譜などを考慮すると、布師首は、葛城臣と密接な関係を持っていた可能性が高い。布師首磐が、天智天皇の時に河内直鯨を大使とする遣唐使に同行し、布師首家守や布敷首常藤などが、下級の官位を得て藤原京・平城京・平安京などで雑用に従事していたことを考え合わせると、布敷首は、葛城臣や渡来系の氏族であった河内直の下で、水上交通や外交に従事するとともに、比較的早い時期から都へ移り住み、下級の役人として働いたと言える。

来目部・山部の再編と大伴連

上記の説話で、伊予国久米郡を本拠地としていた小楯は、（伊予）来目部（直）から山部連に氏族名や職務名が変わり、来目部（大来目部・久米部）だけでなく山部（山守部）も統率するようになった。

来目部は中国・四国地方に多く、通常は農業に従事し、非常時には戦闘員や警護員として武装したり、軍事用の食料を調達したりする部民であった。都で来目部を統括していたのは、高市郡久米郷（奈良県橿原市久米町）を本拠地としていた久米直であった。この地域は、神武天皇の東征説話で活躍したとされる大来目

が住まわされ、県や『日本書紀』に記された最初の屯倉が設置され、大王に食料などを進上していたとされる（『日本書紀』神武天皇二年二月・垂仁天皇五年十月・同二十七年、式内社の久米御県神社）。

久米直は五世紀以降に衰え、「久米直―来目部」の支配系統は、大伴連が管理するようになった。億計・弘計王の説話の頃、倭王権の中心であった大伴連が、上記のような歴史的な背景の下で、大王の御料地である縮見屯倉へ小楯を派遣したのである。

一方、山部とは、燃料に使う木材や鉱物資源の管理など、山林原野に関することを行った部民である。山守部とは、そのなかでも特に朝廷の山林や禁野を管理する部民のことで、八世紀以降は守山戸と呼ばれた。このように、山部と山守部は、厳密に言えば異なっている。

しかし、吉備（上道）臣が領有していた山部が、雄略天皇の死後に王位をねらった吉備稚媛（雄略の妃）と星川稚宮皇子に加担した罪で奪い取られていること、山（守）部（連）に関する記事が清寧天皇から仁賢天皇の頃に集中していることから、山部や山守部も含めた山林原野に関する部民が、この頃に再編されたと言えるであろう。大伴連が久米直を統率し、物部大連尾輿が胆狭（現在の大分県下毛郡から福岡県京都郡）の山部を領有していたことから、実際には、大伴連が山（守）部に対して大きな影響力を持っていたと考えられる（安閑元年閏十二月）。

淡河川・志染川・明石川上流など、縮見屯倉の経済的な活動範囲に含まれていた淡河中村遺跡（北区淡河町中村）や福住遺跡（西区押部谷町福住）から、五世紀後半の竪穴住居や朝鮮半島系の土器、五世紀末期頃の竪穴住居一棟、柱穴約三〇基、鞴の羽口、鉄滓などが見つかっている（工房である可能性は低い）。八世紀の

後葉には、韓鍛首（広富）が、縮見屯倉のあった地域の大領（郡を統轄する役人の長官）であったことから、縮見屯倉の付近では実際に渡来人が移住させられ、鉄の鍛造などを行っていた可能性が高い。

二造を通した地域支配

上記の説話で、「司」と記された役職は、『日本書紀』清寧天皇二年十一月条や『古事記』『播磨国風土記』では、「（播磨の）国司」「（針間の）国宰」「（針間国の山門の）領」となっている。これは、下記のように、地域支配を担う役職の整備過程を反映したものであり、大筋では同じことを示している。「領」はミヤツコもしくはツカサと読み、「播磨にある朝廷の御料地に派遣された使者」という意味である。

当時は、「朝廷に仕え奉る臣・連・二造、二造は国造・伴造なり」と記されているように（『日本書紀』敏達天皇十二年是歳条）、伴造や国造と呼ばれる役職の人が、直接的な地域支配を行っていた。そのなかで、地域支配の中心は国造であり、六世紀以降しだいにその比重を高めていった。

しかし、伴造が、部民の把握などを通して行っていた地域支配を軽視することもできない。大和・河内にいた大王や有力豪族は、それぞれ二造（国造・伴造）を組織し、政府の行政機構を作り上げるとともに、間接的な地域支配を行っていた。大王や政府が各地に対して直接的に何かを行う場合には、その都度、宰と呼ばれる使者を派遣していた。その後「道」と呼ばれる広い範囲を統治する「総領」（当初は大宰）と、「国」と呼ばれる行政区画を統治する国宰が常駐するようになった。これらは七世紀の後半に再編され、八世紀以降にクニ（国）という行政組織となり、国司が統轄するようになった。

上記の説話で「新嘗（祭）に供える物を調達するため」と記されていた職務内容は、清寧天皇二年十一月

条や顕宗天皇即位前紀白髪天皇二年十一月条の一云では「大嘗（祭）に供えるものを調達するため」「郡県を巡行して田租を徴収するため」となっている。これは、下記のように、田地（熟田）を媒介とした統治権のあり方を反映したものであり、大筋では同じことを示している。

忍海部造の細目の所で行われていた祝宴は、『播磨国風土記』では「新室の宴」となっている。これは、新嘗祭のことを示していると考えられる。小楯が播磨国内の御料地から集めた熟田の収穫物は、大王が都で主催する新嘗祭に使われることになっている。新嘗祭は、単なる収穫祭ではなく、その土地で初めてとれた物（初物）を食し、統治権を示す重要な儀式であった。屯倉・県・田部などが設置された御料地では、倉・社・神殿などを媒介とした新嘗祭を行うことで、初物に対する神への感謝を示し、共同体としての結束力を高めるとともに、収穫物やそれを収穫した土地の支配権を知らしめていた。

縮見屯倉は、（地方）伴造である細目が直接的な支配を行い、清寧天皇の意向を反映して小楯を派遣した大伴連が間接的な支配を行っていた。それ故に、縮見屯倉に関する新嘗祭が二重に行われていたのである。大和や河内の勢力が西方へ進出していく時、初物を実見し食する新嘗祭へ関与していくことが大きな意味を持っていたのである。

渡来人の再編と葛城臣・大伴連

上記の説話で、細目は、忍海部造と縮見屯倉首という二つの職務名を持ち、忍海部の統率や屯倉の管理などを行なっていた。忍海部とは、履中天皇もしくは飯豊女王（押羽皇子と葛城臣の娘との間に生まれ、葛城地域の宮で暮らし、億計・弘計王を迎え入れた）の名子代という説や、鉄工に関係する渡来人（忍海漢人）もしくはその支配下の部民という説がある。少なくとも忍海部は、葛城臣

と関係し、鉄工に関わる集団であったと言えるであろう。

一方、屯倉とは、大王や政府が領有していた施設や土地のことである。ヤケ（宅・家）を中心に、その周辺にある田畑や山野河海から得た物を倉に保管し、倭王権の経済的な拠点として財政を支えるとともに、政治的な拠点として地域支配を拡大していく役割を担っていた。

田部（たべ）と呼ばれる部民が、屯倉の活動を支える集団として設置された。忍海部などは、七世紀の後半に領域的に再編され、五十戸という徴税単位となり五十戸造や五十長が責任者となった。その後、八世紀以降にはサト（里・郷）という行政組織となり、サトオサ（里長・郷長）が統轄するようになった。

一方、縮見屯倉などは、二造（国造・伴造）とともに七世紀の後半に領域的に再編され、コオリ（評）という行政単位となり、評造（こおりのみやつこ）や評司（こおりのつかさ）が責任者となった。その後、八世紀以降にはコオリ（郡）という行政組織となり、郡司が統轄するようになった。しかし、屯倉制の基本的な要素であったヤケ（宅・家）・クラ（倉）・タ（田）とその経営方針は、郡制の郡家・正倉・田租として引き継がれていった。

葛城臣が領有していた忍海漢人などの渡来人は、東漢（やまとのあや）氏の一員であることから（『坂上系図』所引『新撰姓氏録』逸文）、葛城臣が没落した後に倭王権に没収され、東漢氏が統率するようになったという説と、東漢氏や西漢（かわちのあや）氏が、朝鮮半島への政策を主導していた葛城臣の勢力範囲の外縁に居住していることから、当初より葛城臣が統率していたという説がある。

しかし、当初は葛城臣が、布敷首と忍海部造に通じる一族を通して、神戸市域の海岸部と内陸部を掌握していたが、葛城臣が没落した後、大伴大連室屋（むろや）が、忍海漢人や葦屋漢人（あしやのあやひと）など旧来の朝鮮系の漢人（あやひと）だけでなく、

新来の中国系の新漢人（今来漢人）も含めて渡来人を再編したと言えるであろう（『日本書紀』雄略天皇七年是歳条）。

なお東漢氏とは、文（書）直や坂上直など、四世紀の末から五世紀の前半頃に渡来した人たちを一つの氏族としたもので、大和国高市郡桧前郷を本拠地にしていた。その後、崇峻天皇の時に物部連を打倒した蘇我臣と密接な関係を持ち、西漢氏よりも発展していった。一方、西漢氏とは、河内直など五世紀の末頃に渡来した人たちが、東漢氏に対抗して名乗った氏族名で、河内国河内郡を本拠地にしていた。

漢人が再編されていた頃には、全国にいた秦氏も、秦酒公を伴造（管理者）として再編された。秦氏とは、四世紀の末頃に渡来し、東漢氏と並ぶ二大勢力となった渡来人であった。有馬郡幡多郷（北区八多町付近）にはハタという地名が残っているので、秦氏がいたと考えられる。これらの渡来人は、海外の進んだ知識や技術にもとづいて、朝廷の財政や外交などに携わり、神戸市域だけでなく、日本列島各地の地域社会や国家の形成と発展に対して大きく貢献した。

2　クニと国造氏

葛城直・荒田直と荒田郡

奈良盆地の葛城地域には、葛城臣の他に葛城国造に任命された葛城直がいた。この氏族の始祖は、高御魂命（高皇産霊尊）の五世孫である剣根命であり、葛城臣とは異なる一族であった。高御魂命は、天照大神よりも古い皇室の神とも言われ、大伴連などと関係していた。葛城直

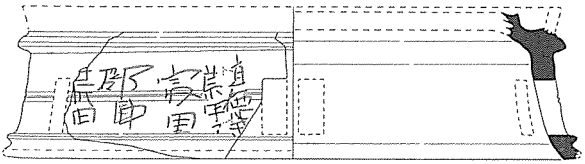
は、摂津国豊島郡や河内国などに居住し、カバネが天武天皇の時に直→連→忌寸と変わった。一族のなかには「首」を持つ者や、八世紀の中葉に「宿祢」を与えられた者もいた。

葛城直は、欽明天皇の時に外交使節の接待を行い、用明天皇の妃を出した可能性がある。また、葛城山田直は、欽明天皇の時に蘇我臣が中心となって設置し、経営していた白猪屯倉の管理者になっている。葛城直と葛城山田直は同じ一族であったか不明である。しかし、葛城直は、葛城臣の没落後、大伴連や蘇我臣と関係を持ち、国造や接待係になるとともに、県や屯倉の田地経営などを行っていたと言える。

兵庫区荒田町という地名の由来は、荒田別が住んでいたからという説（神功皇后・応神天皇紀）、荒田郎女（木之荒田郎女）の名子代が設置されていたからという説（応神天皇紀）、湊川が氾濫する荒れ地であったからという説などがある。しかし、その他にも、『新撰姓氏録』の和泉国神別に記されていた荒田直との関係も想定しておいた方がいいのではなかろうか。

この荒田直は、葛城直と同じ始祖であり、五・六世紀に倭王権の管理下におかれ、全国へ須恵器を供給していた陶邑にあった陶荒田神社付近（堺市中区辻之）を本拠地にしていた。直というカバネを持っていることから、有力な氏族であり、葛城直と関係していた可能性が高い。

大田町遺跡（須磨区大田町）は、須磨駅家との関連が指摘されている。その盛



出典：『神戸市須磨区大田町遺跡発掘調査報告書』（兵庫県教育委員会、1993年）の図面1

図8　大田町遺跡出土の円面硯

土層からは、「荒田郡中富里荒田直□□」と記された円面硯（えんめんけん）の破片が見つかっている（図8）。この硯は、土の成分や技法から、陶邑で焼かれる前に、文字が刻まれたと考えられている。そして、透かしの推定位置と文字の内容から、現存部分の前後には、文字がなかったと推定されている。四文字目の「中」の左側には縦線のヘラ書きが、八文字目の「田」の下側には、「戸」もしくは「部」のようなヘラ書きがある。これは、「中」と「直」を書き損じたものと解釈されている。ただし、人名の部分は、「荒田部直徳□」と解釈する余地も残されており、今後も検討していく必要がある。

荒田郡や中富里という行政組織は、この硯でしか確認されていない。しかし、次の三点より、荒田とは大輪田泊（おおわだのとまり）が設けられた湊川の下流域のことであり、早くから開発され、この地域で中心的な役割を担っていたと考えられる。

①兵庫区荒田町から中央区楠町には江戸時代に荒田村があり、その付近には蔵入地や幕府領があった。②荒田村には五郎池（ごろういけ）や十郎池（じゅうろういけ）と呼ばれている池があった。その池は、一町四方もしくはその数倍の大きさがあり、古代の条里制の痕跡を示している可能性がある。③楠・荒田町遺跡は、この地域の安定した土地にあり、縄文時代の後期から古墳時代に関する遺物や、「池の中納言頼盛卿の山荘あらた」（『平家物語』巻四還御）に関係すると推定される遺構が見つかっている。

八世紀の初頭には六甲山地の南側に荒田郡があり、そこの有力者であった荒田（部）直が、陶邑にいた一族と関係を持ち、硯を入手したと考えられる。田部や屯倉が荒田と呼ばれる地域に設置された確証はない。しかし、神戸市や堺市で荒田直がいた所は、大和や河内の勢力にとって重要な地域であり、大伴連や蘇我臣

と関係しながら、田部や屯倉が設置されていたとしても不思議ではない。

活田長峡のクニと雄伴のクニ

六甲山地の南部は、律令体制に基づく古代国家が成立する以前、「活田長峡国・長田国・広田国」や「雄伴国」と呼ばれていた（『日本書紀』神功皇后摂政元年二月条、『住吉大社神代記』）。

活田長峡・長田・広田国は、神功皇后が朝鮮半島への出兵を終え、都へ帰る時に諸神を祀った生田神社（中央区下山手通）、長田神社（長田区長田町）、広田神社（西宮市大社町）と関係していた。神戸市域の重要な地域には、活田・長田・広田や上記の荒田など、某田の地名が多い。

生田部（大麻呂）が、安房国安房郡広湍郷河曲里に居住していたことから（『平城宮発掘調査出土木簡概報』二二、三一頁）、当時、生田部という部民や氏族が実際にいたことが分かる。そして、六甲山地の南部では、田部や屯倉・県などが多く設置されていたこと、神社・屯倉・県と（祭）田は、密接に関係していたことを勘案すると、活田・長田・広田は田部や屯倉と関係していた可能性が高い。

写真3　生田神社（中央区）

『新撰姓氏録』の摂津国神別に記されている生田首は、生田神社がある八部郡生田郷を本拠地としていた。この一族は、天児屋根命の九世孫である雷大臣命を始祖としていた。天児屋根命は、中臣氏に関連する氏族の始祖であり、中臣氏が政府の祭官となる六世紀後半に有力な祭神となった。大田町遺跡で見つかった硯から、中臣の一族が荒田郡中富里にいたこ

とがわかる。後述する郡の変遷が妥当であるならば、生田郷があった地域は、当初は荒田郡に属していたことになり、生田首は、荒田（部）直・中臣氏や生田神社と関係しながら活動していたと考えられる（第二章第四節1項参照）。

当時の海岸部には、砂堆（さたい）の後背湿地に形成された田地が広がり、洪水による被害を受けやすかった。これらの地域では、洪水の後の復旧作業や再開発、大和・河内の勢力の進出などを通して、それぞれの神（社）・田地・田部を中心とする地域社会が形成されていたので、「某田のクニ」や「某田部のクニ」と呼ばれていたのであろう。

雄伴国は、五世紀以降に大王の権力が拡大するのにともない、勢力を拡大していった大伴連と関係していた。大伴連は、摂津や河内（大阪府の中央部）の沿岸を本拠地とし、来目部（くめべ）や佐伯部（さえきべ）などを率いて軍事を掌（つかさど）るとともに、部民・渡来人・屯倉の設置や外交問題などにも関わっていた。

特に、允恭天皇から宣化天皇の頃に活躍していた守屋とその孫である金村は、自分達の本拠地の対岸にあり、朝鮮半島へと通じるルート上にあった神戸市域との関係を深めていった。この頃には、神戸市域のなかに「大伴のクニ」と呼ばれるような地域社会が形成されていたのであろう。

しかし、欽明天皇が即位すると、大伴金村は朝鮮半島に関わる失政を指摘され失脚する。これにより六甲山地の南部だけでなく、大伴氏と関係していた各地の地域社会が再編されていったと想定される。億計（おけ）・弘計（をけ）王の説話に登場してきた縮見地域の忍海部や屯倉は、倭王権を担う氏族が葛城臣から大伴連へ移行するなか、新置されたり再編されたりしたのであろう。大伴連の没落後、これらの部民や屯倉を誰（大伴連・他の

有力な一族・国造）が管理していたのかは不明である。

国造のクニと河内・武庫のクニ

国造が統治していた地域は「クニ」と呼ばれた。そして、国造になった氏族の多くは直というカバネを与えられた。『先代旧事本紀』の「国造本紀」には、全国に設置された一二七の国造が列記されている。それによると、六甲山地の南部には凡河内国造が、西部には明石国造が設置されている。したがって、それぞれの地域は「凡河内のクニ」「明石のクニ」と呼ばれていた。一方、六甲山地の北部は、どの国造（もしくは、伴造）が関与していたのか不明である。

凡河内国造の凡とは、「あまねく・おしなべて」という意味であり、「凡」がついている国造は、規模の小さい国造を再編して設置したという説もある。一方、河内とは、当初は大阪湾の沿岸地域を示していたが、後に摂津・和泉・河内の国に分割されると、大阪市の東側だけを示すようになったという説や、淀川の内側という意味であり、淀川より南側は「かわちのクニ」と呼ばれ、淀川の外側（北岸）は、当時の中心地であった河内から見た向こう側という意味で「むこ（う）のクニ」と呼ばれていたという説がある。

また、江戸時代に作られた絵図によると、六甲山から流れ出ている都賀川が、六甲谷川や六高谷川と記されていることから、現在、六甲と呼ばれている山や地域は、古代では「むこ（う）」と呼ばれ、務古や武庫と表記され、中世もしくは近世になると、六甲や六高と表記されるようになり、しだいに「ろっこう」という呼び方が定着していったとも言われている。

「凡河内のクニ」と「河内・武庫のクニ」との関係は、不明である。凡国造の性格や下記の凡河内直の動向を踏まえると、六甲山地の南部は、凡河内国造が統治する「凡河内のクニ」の西端にあたり、「某のクニ」

と呼ばれた多くの地域社会が「凡河内のクニ」に再編されたのであろう。

3　倭直・物部連の盛衰と凡河内国造・明石国造の設置

倭直と六甲山地南部

倭直は、大和国城下郡大和郷（奈良県天理市佐保庄町付近）を本拠地としていた。倭直の始祖は、珍彦、長尾市（宿祢）、麻呂などと呼ばれ、古くから大和や河内の勢力の軍事・外交・水上交通・祭祀・御料地の管理などに関わっていた（『日本書紀』神武天皇即位前紀甲寅年、垂仁天皇三年三月条、仁徳天皇即位前紀）。

その中でも珍彦は、神武天皇が日向から東へ向かっている時に速吸門の国神として現れ、大和へ導く従者として活躍した。そして、倭国造に任命され、神知津彦命（椎根津彦命）の名を与えられた。速吸門とは、潮の流れが速い海峡という意味であり、明石海峡のことと考えられている。

神武天皇と倭直は、いずれも西の方から奈良盆地へ移動し本拠地にしている。これは、九州や河内の勢力が大和へ進出し、古代国家を誕生させたことを示していると解釈する説もある。六甲山地の南・西部の勢力が、沿岸部の交通・祭祀・御料地などを通して、古代国家を作り上げていった勢力の東方もしくは西方進出と関わっていたと言えるであろう。

倭直や明石海峡付近の地域社会は、仁徳天皇が死亡した時に一つの転機を迎える。住吉（大阪市住吉区）にいた仲皇子は、葛城臣の娘である黒媛を犯し、同母兄で即位する直前の履中天皇を殺そうとする。その

時に吾子籠は、野島（津名郡北淡町）の海人であった阿曇連浜子とともに仲皇子に加担した。仲皇子が殺されると、その罪をつぐなうため、吾子籠は妹の日之媛を献上し、浜子は顔に入れ墨をした。その後、倭直は采女を献上するようになり、野島の海人は倭の蔣代屯倉で使われるようになった。倭直は、水上交通などに関わる氏族であり、阿曇連は応神天皇の時に海人を統率する役職に就いた氏族であった。また仲皇子がいた所は、住吉津や住吉大社があり、大和や河内の勢力が朝鮮半島へ赴くための重要な地域であった。

このように、履中天皇が即位した頃（四世紀の末）、瀬戸内海の航路に関わる地域や氏族がことごとく離反し、大和や河内の勢力は危機を迎えていた。明石海峡付近の水上交通として見た場合、これは、羂坂王と忍熊王が、異母弟である応神天皇の即位に反対し、赤石・菟餓野・住吉を舞台に神功皇后へ反旗をひるがえした事件以来の非常事態であった（『日本書紀』神功摂政元年二月条）。

明石海峡の付近に巨大な前方後円墳が作られ始めたことや、六甲山地南部と明石川下流における地域社会の変化は、吾子籠の事件を反映していたのかもしれない。その後、吾子籠は、雄略天皇の時に倭国造として宍人部を献上し、倭国造手彦は欽明天皇の時に紀男麻呂宿祢などに従い朝鮮半島へ出兵している。このように、六甲山地の南・西部に影響力を持っていた倭直は、倭国造となって活動範囲を奈良盆地に縮小させながら、大和や河内の勢力の従順な官僚として活動するようになった。

王権と物部連

応神天皇は死ぬ一年前に、菟道宮にいた稚郎子皇子を皇太子とし、大鷦鷯皇子をその補佐役に、大山守皇子を山川林野の管理役に任命した。応神天皇が死ぬと、稚郎子皇子は大鷦鷯皇子に皇位を譲りたいと言い、両者で譲り合った。そのなかで大山守皇子は稚郎子皇子を殺そうとしたが、逆に

大鷦鷯皇子に殺されてしまう。その後、稚郎子皇子は皇位を譲るために自殺し、妹の八田皇女を後宮に入れて欲しいと遺言する。

大鷦鷯皇子は即位して仁徳天皇となり、葛城襲津彦の娘である磐之媛を皇后とした。磐之媛は、仁徳天皇三十年に八田皇女を妃とすることに反対し、筒城宮に籠もり五年後に死んでしまう。八田皇女はその三年後に皇后となった（『古事記』では、皇后にならず身を引いている。その他の和珥系の妃と同じく実在を疑う説もある）。

その年の七月に、仁徳天皇と八田皇后が避暑のため高い建物にいると、菟餓野（兵庫区夢野町付近、もしくは、都賀川付近）から鹿の鳴き声が聞こえてきた。猪名県の佐伯部はこの鹿を殺し「苞苴」として献上した。仁徳天皇はその行動を怒り、佐伯部を安芸国の渟田（広島県竹原市付近）に移動させた。その後仁徳天皇は、八田皇后の妹である雌鳥皇女を妃にするため、異母兄弟の隼総別皇子を派遣した。稚郎子皇子・八田皇女・雌鳥皇女は、いずれも応神天皇と宮主宅媛（和珥臣の祖先である日触使主の娘）との間に生まれた兄妹であった。

隼総別皇子は雌鳥皇女と関係を持ち仁徳天皇を侮辱した。そこで仁徳天皇は、吉備の品遲部雄鰒と播磨の佐伯直阿俄能胡を派遣し、菟田の素珥山から伊勢神宮に逃げようとしていた隼総別皇子と雌鳥皇女を殺した。その時に阿俄能胡は、仁徳天皇の命令に背き雌鳥皇女の玉を盗んだ。しかし、その年の新嘗祭の時、近江の山君稚守山の妻と采女が、その玉を阿俄能胡がつけているのを発見した。阿俄能胡は死罪を免れるため、玉代と呼ばれる土地を献上した。

仁徳天皇の名子代である雀部（名子代のなかでは、もっとも古い）は、菟原郡佐才郷に、八田皇女の名子代である矢田部（八田部・矢部・八部）は八部郡八部郷に、稚郎子皇子の名子代である宇治部（宇遲部・菟道部・

氏部）は八部郡宇治郷に、それぞれ設置されていた可能性が高い。

保安元年（一一二〇）の「摂津国租帳」に記されている佐牙神は、佐才郷に祀られていたと想定されている。住吉川の河口にあった雀の松原（東灘区魚崎を関する所）は、佐才（雀）というサト名の名残りと推定されている（『大日本地名辞書』『日本地理志料』）。このように、六甲山地の南部には、仁徳天皇に関わる一族や地名が多かったのである。

矢田部と宇治部に関係する氏族（矢田部連・矢田部造・矢田部首・矢田部／宇治宿祢・宇治部連・宇遅部連・宇治山守連）は、饒速日命の六・七・八世孫を始祖としていた（『新撰姓氏録』左京・摂津・河内・大和神別／山城・河内・和泉国・山城神別）。これらのなかには、天武天皇の時にカバネが造から連に変わった者（矢田部連）や、連から宿祢に変わった者（宇治宿祢）がいた。

饒速日命などを始祖とする氏族は物部連と関係していた。明石郡垂水郷には式内小社の物部神社があり、物部連が、宇治・古湊川を中心としながら、六甲山地南部の西側から明石海峡にかけて勢力をのばしていたことがわかる。その後、矢田部造は、推古天皇二十二年（六一四）から翌年にかけて、犬上君御田鋤とともに唐へ派遣されている。それ以外に矢田部・宇治部の一族がどのような活動をしていたのか不明である。

また矢田部一族のなかには、鴨県主などと同じく鴨建津身命を始祖とする者（矢田部）や、上・下毛野朝臣などと同じく豊城入彦命を始祖とする者（韓矢田部造）がいた（『新撰姓氏録』山城国神別／摂津国皇別）。韓矢田部造とは、矢田部に編成された渡来人を統率する職務名にもとづく氏族名であった。上記の矢田部造とともに、八部郷を本拠地にしていたと推定されており、六甲山地南部の西側において有力な一族であった

と考えられる。

このように、住吉川・都賀川・宇治川・古湊川の下流には、当初仁徳天皇と関係する地域社会が形成されていた。しかし倭直が転機を迎え、凡河内直や大伴連などの盛衰にともない、六甲山地南・西部の地域社会が変化するなか、宇治・古湊川の流域は物部連と関係を持つようになった。

そして、崇峻天皇の時、物部連守屋が蘇我臣馬子や厩戸皇子（聖徳太子）などに滅ぼされると、物部連の領地の一部は法隆寺に施入されて宇治荘となったり、荒田直が管理するようになり、荒田郡へと発展していく地域社会が形成されたりした。また、物部連の盛衰のなかで、渡来人と関係する一族が上・下毛野朝臣と関係を持つようになった可能性もある。

明石国造と倭直

明石海峡は、西方へ進出していく大和や河内の勢力にとって、瀬戸内海交通の重要な地域であるとともに、最初に遭遇する難所でもあった。この明石海峡を望む所には、兵庫県内で最大の前方後円墳である五色塚古墳や、山陽道にある官幣大社四座のうち三座が祀られている海神社（垂水区宮本町）があった。これらの被葬者や祭主は、後に明石国造となっていくような有力者であった。明石国造は、「国造本紀」によると、奈良盆地で倭国造に任命された（大）倭直と同じく、応神天皇の時に設置され、都弥自足尼（神知津彦命の九世孫である八代足尼の児）を始祖とする氏族がなっていた。

写真4　海神社（垂水区）

神護景雲三年（七六九）六月には、菟原郡と明石郡に本籍地があった正八位下の倉人水守と外従八位下の海直溝長など三七人に、大和連と大和赤石連の氏族名が与えられた（『続日本紀』）。倉人（蔵人・椋人）とは、朝廷の財政をつかさどる倉（蔵・椋）に関わる職務名にもとづいて、渡来人などにつけられた氏族名であった。一方海直とは、海に関わるさまざまなことに従事する人々（海〔人〕部）を統率する職務名にもとづく氏族名であった。海部を現地で統率していた氏族には、首・公・連・直などのカバネが与えられた。そのなかでも、特に直を与えられた氏族は、国造の一族から任命されたと言われている。したがって、海直溝長は明石国造の一族であったと考えられる。そして、全国にいる海部や海部直などを都で統率していたのは、安曇連（阿曇連）であった。

この記事をめぐっては、次の二つの説がある。一つめは、倉人や海直を名乗っていた倭直系の枝族が、本姓である大和（明石）連を名乗るようになったものであり、倭直一族が、倉人や海直（海〔人〕部）も統率していたことを示している、という説である。二つめは、母方の氏族名で登録されていたのを父方の氏族名に修正したものであり、大和連と倉人・海直が近くに住み、婚姻関係にあったことを示している、という説である。

どちらが妥当か明らかでないが、少なくとも大和連とは、倭国造（倭直）の一族もしくは関連する一族に与えられたものであり、大和赤石連とは、その一族の中で特に赤石に住む一族を示すために与えられたものであったと言える。後に明石郡の郡領（郡司の長官や次官）として大和や赤石といった氏族名が見えることから、大和赤石連は、明石国造の一族であったと考えられる。この想定が妥当であるなら、大和赤石連の本宗

的な氏族名を名乗っている大和連は、菟原郡の郡領氏族や国造氏族であったか、もしくはそれらに匹敵するほどの有力な氏族であった可能性が高い。

凡河内直と凡河内国造

凡河内国造は、『古事記』や『日本書紀』神代第六段によると、山代国造や額田部湯坐連を含む一一氏族と同じく、天津日子根命を始祖とする凡河内直（凡川内・大河内）がなった。凡河内直とは、大阪湾の沿岸地域を統治する職務名にもとづく氏族名であり、カバネは天武天皇の時に「直→連→忌寸」と変わった。慶雲三年（七〇六）には、摂津国造として凡河内忌寸石麻呂の名前が見えるので（『続日本紀』）、凡河内直は、国造が地方官でなくなった後も、地域の伝統的な有力者であったことがわかる。

天津日子根命は、天照大神と須佐之男命が天安河で誓約した時に生まれた後、どのような活動をしたのか記されていない。このような始祖を持つ氏族は、早い時期から大王との関係を持ち、従属性が高かったと考えられている。凡河内直は、地方官として広大な地域を統治するとともに、五世紀の後葉から七世紀の前葉にかけて、航海に関する祭祀や運送などを行っていた。

特に大河内直糠手や矢伏は、推古天皇や舒明天皇の頃に大阪湾に来た外交使節を接待したり船で先導したりしている。この時には、敏売崎で行われる儀礼にも関わっていたと考えられている。しかし、凡河内直香賜は、雄略天皇が新羅へ出兵する前、宗像（福岡県宗像郡玄海町付近）の神を祀るために派遣されたが、雄略の意に沿わなかったので殺されている。また大河内直味張は、「安閑天皇の皇后のために、屯倉とする良田を献上せよ」という命令に従わず、「今より以後、郡司に勿預りそ」という処分を受けている。当時は郡

司という官職はなかったので、国造の地位を奪うという意味であったと考えられている。

これが妥当であるならば、凡河内直は少なくとも六世紀の前葉頃に国造であったことになる。味張は、その罪をつぐなうため、三島にあった竹村屯倉を耕す田部として河内県の部曲を差し出すようになり、大連であった大伴金村へ賄として狭井田六町を献上した。この事件により、大伴連を中心としながら、神戸市域から淀川水系における国造や田部・屯倉の新置や再編が進行したと考えられる。

また、大河内稚子媛は、『日本書紀』によると、宣化天皇の庶妃として椎田君（尼崎市椎堂付近が本拠地）の始祖となる火焔皇子を産んでいる。『古事記』では、他に丹比公（大阪府羽曳野市西部）・偉那公（尼崎市猪名寺付近）の始祖となる恵波王（上殖葉皇子）も産んでいる。『新撰姓氏録』のなかで、火焔皇子を始祖としているのは、椎田君の本拠地の近くにいた為奈真人と川原公だけである。椎田君・猪名真人・川原公は、本来同じ一族であったのが順次分かれていったか、しだいにお互いに密接な関係を持つ一族と見なされるようになったかであり、何れも凡河内直と関係していた可能性が高い。

このように、凡河内直は早い時期から大和や河内の勢力に組み込まれ、六甲山地の南部や西部における倭直の影響力が弱まった後に勢力を拡大していき、猪名川流域の一族とも関係を持つようになった。特に安閑天皇や宣化天皇の頃には、大王の意に従わなかったり大王の妃を出すなど、大きな勢力になっていた。しかし、味張が六世紀の前葉に事件を起こすと、「凡河内のクニ」は大伴連を中心として再編されていった。その後、凡河内直の独立性は弱まり、七世紀の前葉には大和や河内の勢力に従順な官僚として活動するようになった。

凡河内直の本拠地については、当初から神戸市域であったとする説と、推古天皇の頃に大阪府域から移住してきたとする説がある。しかし、後述の遺跡や社寺が、凡河内直や倭直（倭国造・明石国造）の動向と関係していたことは間違いないであろう。

六甲山地南部の地域社会は、先述のような銅鐸や大型の古墳の分布状況などから、弥生時代から古墳時代の初め頃にかけて、東側の方が優勢であった。しかし、四世紀の末から五世紀の初め頃に、五色塚古墳と一対となる念仏山古墳が作られたり、六世紀の初め頃に、松野遺跡（長田区日吉町）で巨大な建物（有力者の邸宅、もしくは神殿）が作られたりしているように、しだいに西側の方が優勢となっていった。

六甲山地南部（特に西側）にいた有力者は、五世紀から六世紀の初頭にかけて大和や河内の勢力と密接な関係を持ち、急速に勢力を拡大していった。大和や河内の勢力は、これらの有力者を国造などに任命して、地域社会の統治を認め、それを媒介として明石海峡を通過する時に重要となる港や地域を、間接的に支配していたのである。

写真5　河内国魂神社（灘区）

式内小社の河内国魂神社（灘区国玉通三丁目）は、大阪湾沿岸の開発と経営に関する神を祀る国魂神社であり、凡河内直が祭主を務めていた。また、室内遺跡（長田区前原町）との関連性が指摘されている「凡河内寺」は、凡河内直が一族の安寧・繁栄・再統合を目指し、白鳳時代に造営した氏寺であった。これらの社寺は、凡河内直による地域社会の成立や盛衰と関係して

いたのである。

また、猪名川と武庫川の間には、猪名寺廃寺（尼崎市猪名寺）と伊丹廃寺（伊丹市緑ヶ丘町）という二つの白鳳寺院が隣接していた。建物配置は、いずれも法隆寺と同じであった。前者は、宣化天皇と凡河内直の娘である稚子媛（わくごひめ）との間に生まれた火焔皇子を始祖とする川原公もしくは為名真人（いなのまひと）・為奈部首（いなべのおびと）が、後者は、凡河内国造や摂津国河辺郡の大領を務めた凡河内直が造営したと想定されている。これらの氏族は、いずれも凡河内直と関係しており、凡河内直が大阪湾の北岸の広い範囲で勢力を誇っていたことをうかがえる。